



作 新美南吉
イラスト 下田昌克

寒い冬が、きつねの親子のすんでいる

森へもやってきました。

ある朝、ほらあなから子どもものきつねが

出ようとすると。

きつね「あつ、母ちゃん、目に何かささった」



さく夜の^やうちに、真白な雪が、どっさりふったのです。
子どものきつねは雪の光の、あまりに強い反しやを
うけたので、目に何かささったと思ったのでした。
子どものきつねは外へ遊びに行きました。

子ぎつね「お母ちゃん、お手てがつかめたい、
お手てがちんちんする」



子ぎつねはぬれてぼたん色になった両手を
母さんの前にさしだしました。

母ぎつね（かわいいぼうやの手に、しもやけが
できてはかわいそうだわ。夜になったら、
町まで行って、ぼうやのお手てにあうような、
毛糸の手ぶくろを買ってあげましょう）



(ピューピュー)

暗い暗い夜が風^ふろしきのようなかげをひろげて
野原や森をつつみにやって来ました。

親子の銀ぎつねはほらあなから出ました。

子どもの方はお母さんのおなかの下へはいりこんで、
そこからまんまるな目をぱちぱちさせながら、
あつちやこつちを見ながら歩いて行きました。

子ぎつね「母ちゃん、お星さまは、

あんなひくいところにも落ちてるのねえ」

やがて、行手^{ゆくへ}に、

ぼつつりあかりが一つ見えはじめました。



母ぎつね「あれはお星さまじゃないのよ。

あれは町のひなんだよ」

母さんぎつねは、ある時町へお友だちと出かけて行って、
とんだめにあったことを思いだしました。

お友だちのぎつねが、あひるをぬすもうとしたので、
お百しように見つかって、さんざ追いまくられて、
命からがらにげたことがあったのです。



子ぎつね「母ちゃん何してんの、早く行こうよ」

子どものきつねがおなかの下から

言うのでしたが、母さんきつねは

どうしても足がすすまないのでした。



母ぎつね「ぼうやお手てを、かた方お出し」

その手を、母さんぎつねがしばらくにぎっている間に、
かわいい人間の子どもの手にしてしまいました。

子ぎつね「何だかへんだな、母ちゃん、これなあに？」

母ぎつね「それは人間の手よ。いいかい、

町へ行ったらね、まず表に円いシャツポの

かん板ばんのかかっている家をさがすんだよ。

それが見つかったらね、トントンと戸をたたいて、

こんばんはって言うんだよ。

そうするとね、中から人間が、すこうし戸をあけるからね、

こつちの手、ほらこの人間の手をさし入れてね、

この手にちょうどいい手ぶくろちようだといって言うんだよ、

わかったね、決して、こつちのお手てを出しちゃだめよ」



子ぎつね「どうして？」

母ぎつね「人間はね、相手がきつねだとわかると、手ぶくろを売ってくれないんだよ、

それどころか、つかまえておりの中へ入れちゃうんだよ、人間ってほんとにこわいものなんだよ」

子ぎつね「ふーん」

母さんぎつねは、持って来た二つの白はくどうかを、人間の手の方へにぎらせてやりました。



(ピューピュー)

子どものきつねは、町のひを目あてに、

雪あかりの野原をよちよちやって行きました。



やがて町にはいりましたが通りの家いえは
もうみんな戸をしめていました。

とうとうぼうし屋がみつかりました。
子ぎつねは教えられたとおり、
トントンと戸をたたきました。



(ギク、木のとびらが開く。)

子ぎつね「こんばんは」

子ぎつねはその光がまばゆかったので、

めんくらって、まちがった方の手を、すきまから

さしこんでしまいました。



子ぎつね「このお手てにちようどいい手ぶくろ下さい」

ぼうし屋「おやおや？きつねの手だ。

これはきつと木の葉このはで買いにきたんだな」

ぼうし屋「先にお金を下さい」



子ぎつねは、にぎって来た白はくどうかを二つ
ぼうし屋さんにわたしました。

ぼうし屋「ふんふん」

ぼうし屋さんこのは木の葉はじゃない、
本当のお金だと思いましたが、
たなから子ども用の毛糸の手ぶくろをとり出して来て、
子ぎつねの手に持たせてやりました。

子ぎつねは、お礼を言ってまた、
もと来た道を帰りはじめました。



「♪・ねむれ　ねむれ　母の胸に

ねむれ　ねむれ母の手に——」

子ぎつねはそのうたごえは、きつと人間の
お母さんの声にちがいないと思いました。

子ぎつねは急にお母さんがこいしくなつて、
母さんぎつねの待っている方へとんで行きました。



母さんぎつねは、ぼうやのきつねの帰ってくるのを、

今か今かとふるえながら待っていましたので、

ぼうやが来ると、あたたかいむねにだきしめて、

なきたいほどよろこびました。

子ぎつね「母ちゃん、人間ってちつともこわかないや」

母ぎつね「どうして？」

子ぎつね「ぼう、間ちがえて

ほんとうのお手て出しちゃったの。

でもぼうし屋さん、つかまえやしなかったもの。

ちゃんとこないいいあたたかい手ぶくろくれたもの」

母ぎつね「まあ！ほんとうに人間はいいものかしら。

ほんとうに人間はいいものかしら」



おしまい